

「節分の日の空模様 (4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

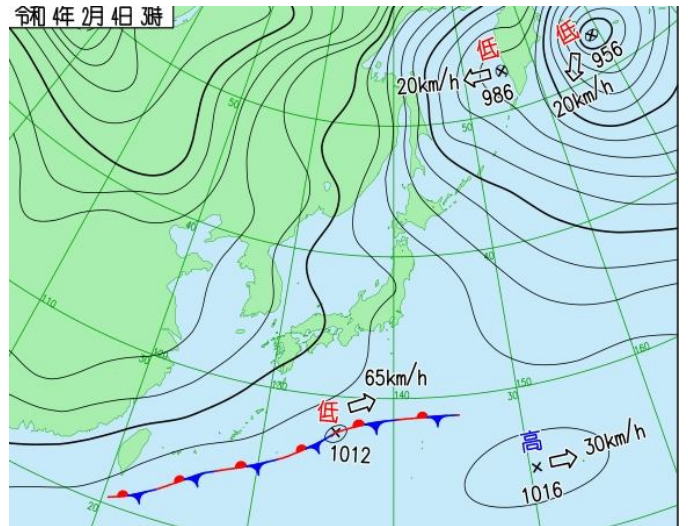
飛行機雲から変化した巻層雲は、そのまま拡散しながら西から東に向かって移動していった。



この「元飛行機雲」の巻層雲は、「背状巻雲」とか「肋骨状巻雲」と呼ばれることもある。ここまで姿が変化すると、これが飛行機雲から変化したものと気づく人は少ないだろう。私はずっと変化を観察していたからわかったが、この雲だけを見たら、「孤立巻積雲」と判断しただろう。



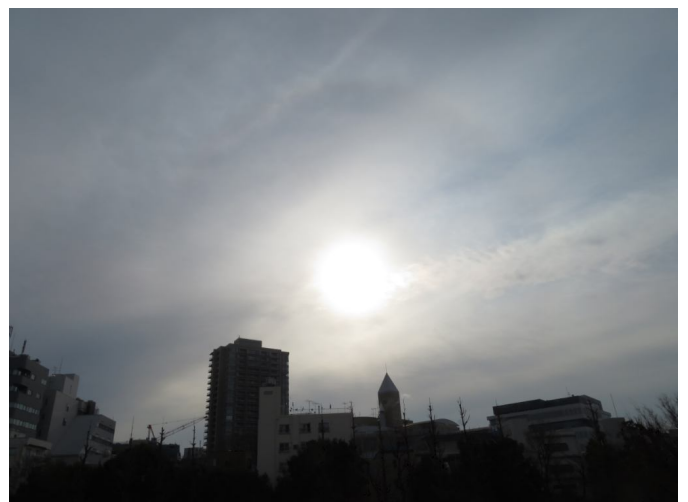
その後もこの巻積雲は、東に進み続け、ついに東側の地平線まで達した。飛行機雲の形成から約 35 分後である。この飛行機雲は「なかなか消えない」どころか、「いつまでも残り続けている」という感じだった。ことわざを信じれば、天気はだんだん崩れていくはずである。



南西諸島付近で「への字型」だった停滞前線上に、やはり南岸低気圧が発生した。その前兆だったのだ。



この日は、地平線近くに飛行機雲が次々と出現していた。雲も、次第に全天に広がっていった。



前線や低気圧が近づくと、まず「巻雲 (すじ雲)」が、次に「巻積雲 (うろこ雲)」、その後「巻層雲 (うす雲)」に覆われることが多い。この日も数時間後に巻層雲に覆われ、太陽に淡い「日暈 (にちうん)」がかかっていた。飛行機雲もことわざは、正しかった。